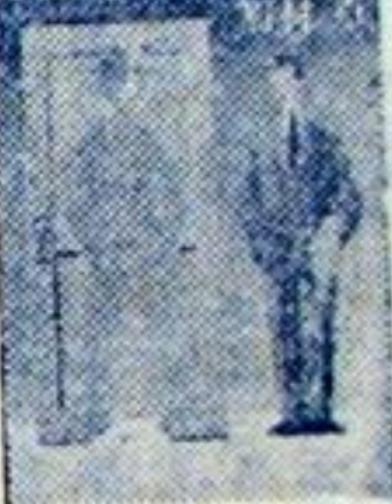


不器用な戦士たち

不器用な戦士たち

卓 講談社

(12/20刊・¥980)



十篇の作品の全部が、サラリーマンを主人公にしている。大半の主人公は、中小クラスの企業社員（役職は、係長課長ぐらい）で、しかも、実直であるが故に、落ちこぼれかかっている、という設定。これは、著者の小説全般にいえることでもあって、自信満々、何の疑いも抱かずに行動あるのみ、なんて主人公はちょっとと考えられない（第一、設定である中間管理職の立場では、そんなことをしたくとも、できないだろう）。物語の前提がますそこにある。しかし、彼らの前には、常識に外れた（現実にありそうにない）無理難題が持ち込まれるのだ。さて、どうするか。ないことを、観念的ではなく現実的に処理していくかなければならない。もし、会社にPTAが出来たら、自分の予感が次々と的中したら、変人ばかりの課の課長に任命されたら、窓際族グループに追放されたら、将来独立して成功すると未来人に告げられたら、あなたは会社の中で何をしますか。たとえありえないとも、タテマエはタテマエという会社と、心やさしき主人公との、これは矛盾の物語でもある。中では、「出色的の新人」「妙な仕草」「おだての階段」などが印象に残った。（伏）